

羽田空港周辺水域 海辺の暮らしとその歴史



天保9(1838)頃

問題1:これは何でしょう?



NPO法人 海辺つくり研究会
鈴木 覚

羽田周辺水域環境調査結果:羽田周辺水域環境調査委員会、国土交通省横浜港湾空港技術調査事務所、財団法人港湾空間高度化環境研究センター。

過去の環境に係わる事例調査



羽田の今昔物語

平成19年度調査

市民参加型生物生息状況調査

過去の環境に関わる事例調査
市民レシジョン調査

市民レベルでの現場環境
調査(ハゼ釣り調査)

羽田・大師の皆さんに話を伺いました

大師のみなさんに話を伺いました。



羽田のみなさん(報告会)

羽田と大師のはじまり

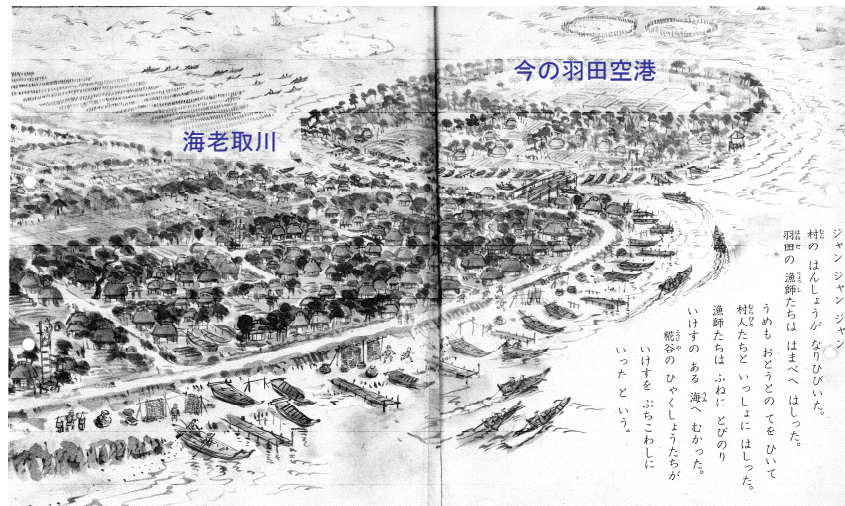
羽田には、「平治元年(1159)、源義朝の没後、平氏に敗れた源氏の落ち武者7人が羽田浦に土着し開村したという里伝」がある(羽田史誌)。

尾張の武士平間兼乗が、故郷を逃れ川崎の地に住み漁業を営んでいると、厄年になったある日、夢に出た場所で網を入れると一体の木像を引き上げ、それを高野山の尊賢上人が知り、協力して弘法大師を祀る平間寺を建立した(1128年)のが、川崎大師の始まりであるそうだ。



武蔵国元禄改定図(1688~1703)に獵師村が出現

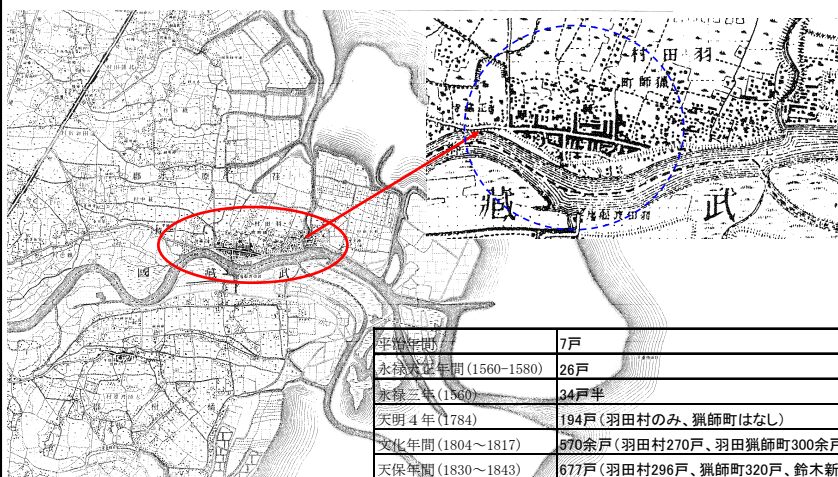
その頃の多摩川河口部(羽田)



江戸時代の多摩川河口部(羽田)のイメージ
(ぬぶんふるさと絵本シリーズ 5 羽田の漁師 より)

羽田は獵師町として栄えた。

明治14年の地図



国土地理院 明治14年図

平河年間	7戸
永禄文治年間(1560-1580)	26戸
永禄三年(1560)	34戸半
天明4年(1784)	194戸(羽田村のみ、獵師町はなし)
文化年間(1804-1817)	870余戸(羽田村270戸、羽田獵師町300余戸)
天保年間(1830-1843)	677戸(羽田村296戸、獵師町320戸、鈴木新田61戸)
明治二年(1869)	917戸
明治16年(1883)	1000戸
明治39年(1906)	2001戸12,247人(菰谷、萩中、羽田、獵師町、鈴木新田)

高潮被害

- 大正6年9月30日、秋の十五夜の日であった(大潮)、昼からの雨はやがて豪雨となり、東風も強まったが、夜11時には小止みになったと思うと突然生暖かい南東の風に変わり大暴風雨が荒れ狂った。東京で45mの風になった。大木は吹っ飛び、家は倒壊。これも明け方には収まった人々も安心して床に入ったとき、突如として大津波が襲ってきた。津波は海老取川を超え、羽田漁師町、糀谷まで一面は海と化した。鈴木町だけでも死者41名を出し、31戸が流出した。

羽田史誌、糀谷の今昔より

■長享二年(1488年):風浪により数千隻の商船などが沈没、被害を受ける。

■延寶八年庚申(1680):高潮浸水して700人余りが死亡し、米は2万石が浸水

■寛保二年壬戌(1742):廻船の沈没水死者多数、潮は通常時より8~9尺高い。

■寛政三年辛亥(1791)八月六日戊:海沿いの地は皆高潮が上がり、特に州崎の被害が著しく、吉祥寺(深川)の民家は住民と一緒に流亡した。

■寛政三年辛亥(1791)九月四日(寛政三年):吉祥寺門前の町や住民ともども海に流されて死者・行方不明者が多数出た。蟹が陸に多く這い上がる時は津浪の兆し。

文政六年(1823):大雨と高潮で死者千人、天保七年(1836):本所深川に2尺浸水、安政三年(1856):品川、本所、深川の津浪(高潮)、安政六年:海嘯、明治四年:風雨海嘯、明治17年:高潮浸水被害、明治四十四年約三尺乃至八尺の高潮、六郷橋撤去(以後渡船となる)、そして大正6年高潮被害

そして多摩川の改修工事



1 (出典: 大正8年度直轄工事年報)

なし畑 支援無くなり ねずみ島

多摩川との多様なかわり(1)

- 羽田は多摩川上流部の木材流通と中継地であった。
- 明治以降、東京の砂利需要が拡大し、多摩川で採取した砂利を運搬する基地となった。
- 明治末期には多摩川沿岸の羽田地区に600艘もの砂利船があった。
- 多摩川の砂は最も良好だった。コップの中に入れてかき混ぜても濁らないのが多摩川の砂。下流側は潮が入るのでダメだった。



『多摩川六郷橋付近』 国立国会図書館蔵 許可済み、国立国会図書館の許諾なく転載を禁止します(2003年)
小川真一撮影の六郷橋『SIGHTS AND SCENES ON TOKAIDOO』収録明治25年5月12日発行

多摩川大橋にまで行き水を汲んでそれを売る人がいた。今でも「水屋」という屋号がある。水屋は船を左右に揺らして舷側から船の中に水を入れ、最後に手桶で船の中に貯まった水の量を調節して戻ってきていた。

多摩川との多様なかわり(2)

- 昔は、今よりも水量が多く、今の高水敷付近も深くて子どもは行けなかった。
- そのうち、ダムができて上げ潮がきつくなった。
- 山水は怖くない。肥沃な土壌を畑に運んでくれる。長十郎が成長した原因。
- 多摩川の水が真水になることがありそのときは障子を洗に行ったりした。
- 空襲に会った夫は、多摩川の水の中に入って顔だけを出して、羽田の町が全部焼けてしまっているのを見ていた。
- 多摩川に入ってくるのは結構技術が必要だった。河口部の白波の立つ浅いところは極力避けることが必要であった。夏の真南が高い。風が強い日などは、曳航する船が波と風に煽られ危険に曝されることもあった
- 海苔の乾燥場が最初は無かったので、多摩川の河川敷に借り、ストーブで乾燥させた。
- 羽田節に出てくる中村投網とは、多摩川上流のほうで行なわれ、弁天橋付近では縄船といって延縄でハゼなどを釣っていた。



尾瀬は夏 多摩川通年 思い出す

海辺の恵み(漁業)

- 手ぬぐいで、水を掬うとよくアミが取れた。
- アミは、2月には羽田沖にいたが、6月には浅場に移り、7月は多摩川近くに
来た。アミは幾らでもとれた。そして、売れた。
- 多摩川は、その昔、丸太(筏)が流れていた。大雨が降ると大きな丸太が流
れてきた。魚のすごいマルタもいて、「カン(寒)マルタ!カン(寒)マルタ!」と
言いながら売り歩く人もいた。夏場のマルタは美味しくないが、冬場は身がし
まって美味しかった。
- 時期によっては、ボラとかマルタを専門にとる漁師がいた。4杯の船で年寄り
と若手で追い込み漁のような方法でとった。六郷橋の手前付近まで行った。
- 夏は、小手繰りでシャコもとるが、夜、河口でクルマエビばかりとっていた。

年次	地区	白魚	
		漁獲量	金額
明治32年	東京市	3,332	5,153
	荏原郡	970	4,750
	南葛飾郡	65	472
	計	4,367	10,375
明治40年	東京市	184	954
	荏原郡	500	2,500
	南葛飾郡	62	618
	計	746	4,072

多摩川では、シジミ漁師がいた。

多摩川では、貝を取る人やボラやウナギをとる人が
いたが、片手間だった。ウナギカキという言葉は当
てにならないという意味だった。

白魚も大川の名産だったが、明治後半から大川に
かわり、多摩川の名産となっていた。

海の豊かさ

戦争直後は工場もなく、仕事はなかったが、
「海に出れば生活ができるありがたいものだった」

夜中に海賊が海苔網を盗みに来る、
「海苔網は万札が海に浮かんでいるようなものだ」

昭和30年代の一時期には、羽田の地先で赤貝が湧くように獲れたことも
あり、東京湾の恵みのお陰で父たち兄弟の暮らしは安定した。

戦後、数年間漁師をやった。4艘の船でボラなどの追い込み漁を行った。
その頃は漁師の羽振りがよく、お金が必要だったので漁師になった

赤貝は落ちている。足の土踏まずにハゼが入ってきた時代だった。

潮に乗り遅れたカレイを子供が見つけて「ここに魚が落ちている」と父
親にいうわけですよ。

昭和7年

ウナギ	48,100	イワシ	2,100
クロダイ	19,300	シラウオ	19,800
カレイ	28,680	シバエビ	46,350
イナ・ボラ	7,730	クルマエビ	34,200
ハゼ	45,500	カニ	87,750
セイゴ	4,400	シャコ	30,000
アナゴ	19,250	その他	16,000
ギンボ	315	ハマグリ	62,000
コハダ	240	その他の貝	10,000
合計		682,615	

多摩川と子ども達

- 男の子たちは多摩川を良く泳いで渡り、スイカを失敬して帰った。小学校高学年は、泳いで渡れないと子供の中で一人前扱いされなかった。
- 小学校6年の頃、多摩川を泳ぐのが禁止されたが、泳いでいたところ、警察が見回りに来て、脱いだ衣服を全部持っていかれてしまった。皆で海老取川の水上署まで裸で謝りにいって、服を返してもらった。
- 大師橋から多摩川に飛び込んだ者は、子供仲間のヒーローだった
- 近隣の小学校と比べて羽田小学校の児童が、一番泳ぎがうまかった。

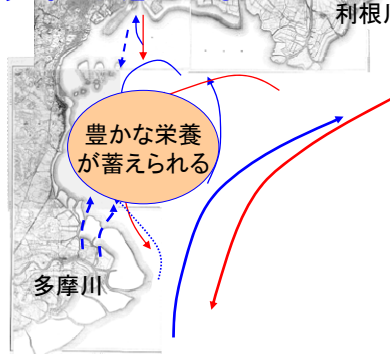


現代にも多摩川の水辺で遊ぶ子供たちがいました。池をつくり取った魚を入れて遊んでいます。

いにしえは 渡る多摩川 ガキばかり

海と多摩川 — 江戸湾の豊かさのわけ —

浅草海苔を著した岡村は、隅田川の栄養が川の改修で南に流れるようになったと述べているが…



利根川(江戸川)

多摩川と利根川(江戸川)に挟まれた江戸湾は両河川と隅田川からの恵みを存分に受けることができた。

河口デルタが岬となって江戸湾の栄養を滞留させた。

東京湾の海苔の声価ある所以は、市より流出する汚水の為である(高木さん 明治15年)

海苔の香や江戸百万の水の味 榛洋(明治)

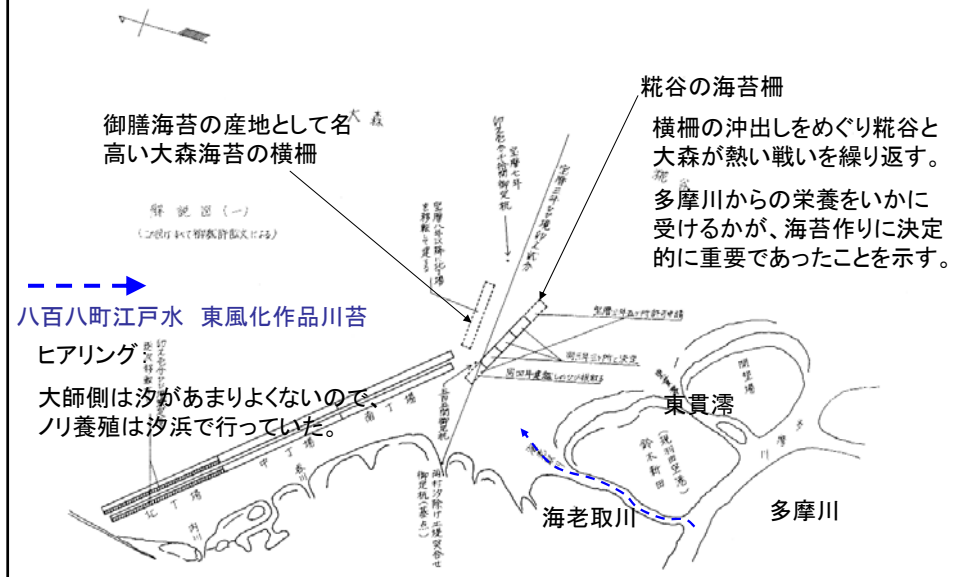
行く水や何にとどまる海苔の味 其角(元禄)

時は流れて

カキ食えば腹が成るなり東京湾 鱸(平成)

海苔の議論では隅田川からの栄養が品川、大森へと広がるとしている。

多摩川の恵みをもう少し考察



川を挟んで 一諍いの歴史一

羽田と大師の争い

■明和の争論：稲荷新田の十四郎が蛤を仲買人に販売、羽田獵師町は、農民が貝類をし、さらに販売したカドで代官所に訴え、蛤代2貫530文は没収、過料3貫文となる。

■天保済み口証文：獵師村と磯付百姓村の争い。百姓村が人口が増え、漁業をしないと生計が立たないと訴え、獵師村は認められないと

■安政の事件：大師河原・川中島村の多くが貝捲き漁をしているところを、羽田獵師村（取締りの権限あり）が発見し、詫言状を提出。

■明治11年大師河原事件：公有水面を官有とし、その認可を府県が行うことになったため、神奈川県知事は、県内の漁業者のみに入会を許可すし、東京府側（羽田）の漁民を締め出す。4月にはバンドウアオサを刈取り肥料にするが、非常に貴重なものであり、入会から締め出されると大変なことになると大騒ぎになった。東京と神奈川が調整を図り旧慣に戻すことで決着。

あのアオサ けんかするほど 貴重なり

川を挟んで —小さな競合(大師からみた羽田)—

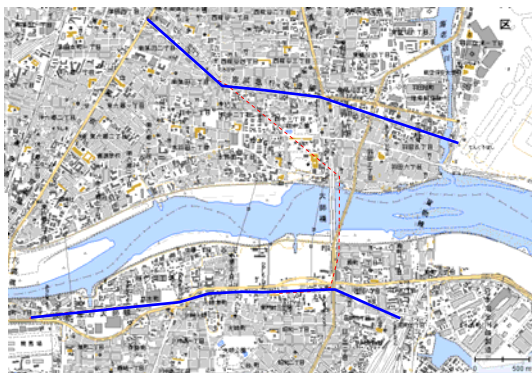
■都と県の境界:東京はどんどん神奈川県にさあ進出してきて、俺たちが子供の頃親父が海苔ひびをやっていて、大師橋のほうからみると今ある空港の裏手も大師の漁場だったんですよ。昔の空港の東は大師の漁場だったですよ。漁業権がなくなったから神奈川県の海がなくなったというのは、東京になるのは、陰謀ではないか。

■スイカドロボー:こちらは畑があるが、向こう(羽田)は畑がないわけですよ。そうするとね、畑のものをよる食べに来るんでだって。親父によるとスイカはちゃんとしてんだって。中は無くなって軽くなっちゃっているわけですよ。ストローかなんかですっちゃって。(大目にみた)

■河川改修:地元は、羽田側と公平に後退してくれるように陳情したが、「日本百年の大計に基づく計画である、殿町は十分余裕があるが、羽田側はすまいが増えて狭く、水没させることはできない。」……いくら国のためと言っても自分の所有地が半分になるのは抵抗があった。昭和のはじめであり、赤旗を振るわけにもいかず。だからみんな泣き寝入りした。

川を挟んで —交流—

- ・ 大師橋ができるとなると、お互いに漁村と農村の助け合いが起きる。経済的な交流だけでなく、お嫁さんにいったりお婿さんにしたり行くといった人的な交流も続いていた。



今はなくなったけどね！！

正月には渡船がでて、大師(川崎大師)にお参りに行った、穴守稲荷も渡船で行った(戦前は今の羽田空港にあった)。

大師で野菜を作っている人は穴守稲荷に来て売りさばき、そのお金で、商店街で色々なものを購入して行った。長十郎梨とか果実もよく売っていた。

羽田と大師をつなぐ京急線の計画もあった。 のど元を すぎて仲良し 川向こう

にぎわう穴守稲荷



大正時代の参道風景。近くに温泉かわき、旅館や料亭が軒をならべて、春の涼干野、夏の海水浴にはとくに繁昌した。名物のみやげ物として、アサリやハマグリ、せんべい、フグちようちんなどが人気をよんだ。

JALiたれも 遊ぶ参道 ANA守さん

かつの地域のくらしの意味は？ よく言われていることです...

- 湯川洋司 流域のくらしと民俗より
- 「あの激しい時代を経て日本人は物欲だけは満たされたが、他方で何か大切なものをなくしてしまったような気がする。それらは、たとえば、山や川の自然であり、それによって生きる知恵であり、働きがいのある仕事であり、人と人との協同などであっただろうが、一口に言えば故郷を失ったのではないかと私は思う。」

河口部の海は豊かであったが、その収穫は不安定であり、危険な場所でもあった。

「やはり板子一枚下は地獄だ」

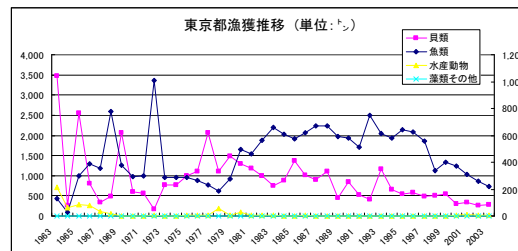
急な時化にあい、帆と櫓掛けで帰ってくるが、父は船にロープで体をくくりつけて置けという。船から落ちると、皆が探すのに苦労するが、くくりつけられずに見つけられるからという。

昭和16年1月20日 どんよりとした曇り空で海苔採りに最高の日であったが突然竜巻雲が発生、北西の大突風が起き、大森・羽田で46名の犠牲者を出した。源正寺で合同葬が行われた。

「明日はネーゾ」：金沢柴の神奥担ぎの掛け声

「海苔は運草」

海苔も今日、採らないと明日の雨で全滅してしまうことがある。それで、採れるときには必死で仕事をして採る。海苔仕事も明日はないつもりで仕事をした。



自分の才覚により稼ぐことができた。また、互いの協力、助け合いにより生き抜くことができた。

チャンスとセーフティネット

才覚

海苔は場所がある程度決まっていたが、打たせは東京湾の入会であり、自分の才覚でどこに魚がいるかを見つける必要があった。

風呂屋で取れた場所の情報交換をし、その逆を行こうとしたりした。

海苔はくじ引きで柵の場所が決まるため、漁場の場所ごとに水温や潮の流れなどの情報を細かく調べておき、場所場所に応じてヒビの張り方を決めた。

海苔は春海苔回収後に成長が遅くなるので網を上げて塩をまぶして寝かしたり、冷凍倉庫に入れてもらったりと、様々な工夫をした。

網ひびに変更するにあたり、どの高さに網を設置するかについて、内湾全体で、大学・試験場・漁業者が心血を注いで調査を行い、決定した。

協力と助け合い

もやい制度というものが団結力になったし、生活の面でもお互い助け合った。海苔ヒビ場が同じ場所になるようにくじも一緒に引いた。

共同で漁船をチャーターして海苔移植に千葉まで行った。千葉と大師では海苔の種付け時期が違うので、千葉の人たちもこちらに来て種付けし、交換した。

祖父が亡くなり父は若くして一本立ちしたので、技術を子安の漁業者から漁具の借り、仕立て方や引き方など教わって腕を上げた。子安の人たちとは、父が亡くなった今でも交流を続けている。

祭りの時には一つの町会が独立国のように団結したものだ（戦前）。

代々受け継いだ才覚で、今日はこちら、今日はこちらと潮時をみながら魚を追っていった。そこでみんなが行って作業をする。それもみんな共同作業をする。町の生活自体もそういうところから共同的なものになっていった。

安保闘争の頃、機動隊に追われた学生をかくまった家も多かった。善悪に関わらず助ける気風が羽田にはある。

「めし あんかあ」と声をかければ「おう、あんよ」と、お鉢ごと持ってくる

横山「空港のとなりまち」より

地域にあった大切なもの

生きる糧が得られる場

自分の能力を生かして、必死に努力し、危険を乗り越えていけば、それなりの成果が得られた。

ハイリスク・ハイリターン

危険

つらい仕事

才覚

海苔は真冬の仕事

穴守さんは羽田獵師町を控えていたので大漁があればお金が入っていた。暮らしも派手であって、花街や料理屋もあり賑やかであった。

暮らしていける精神的なものを得られる場

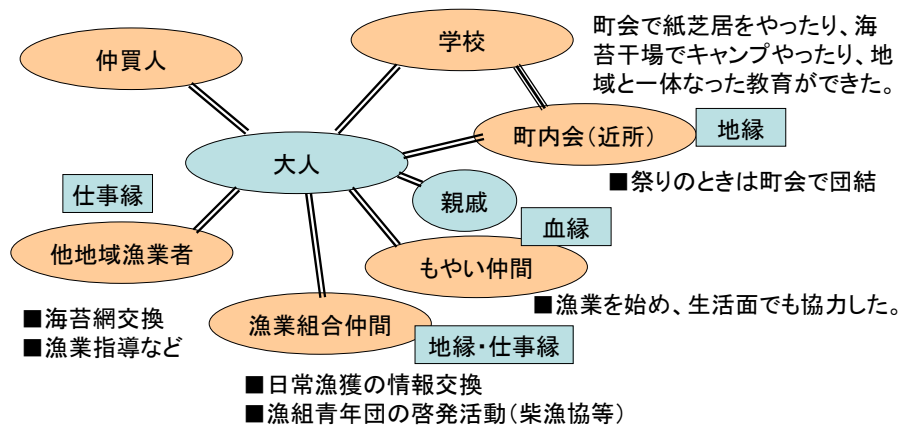
生業そのものが努力と成果。重層的な人と人とのつながり

羽田の町は、現代でも「ガラガラおーい、いっかあ？」と行って尋ねられる。お互いの気心が知れており、鍵もあまり掛けない。

「さよなら」と言って分かれた後、がっちゃんと言葉を掛けることは私にはとてもできない。

（ワンルームマンションを批判して）あの縦の長屋はいけな。長屋はやはり横でなくちゃ

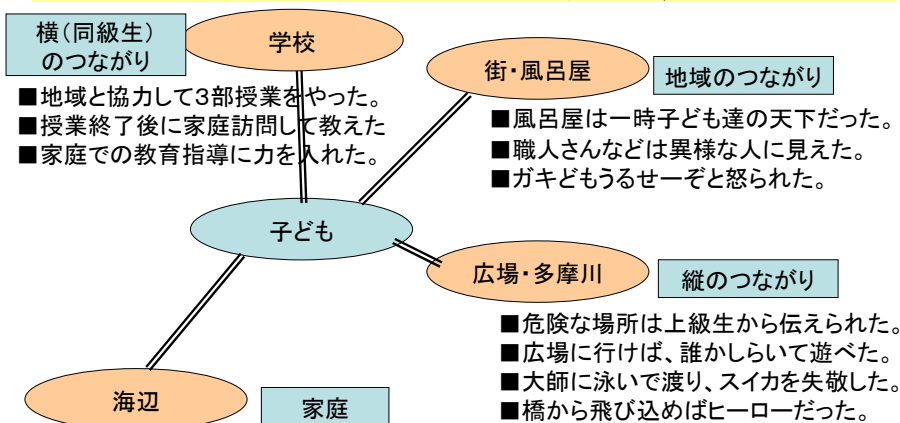
ネットワーク＝縁・絆(1) 人と人とのつながり



親戚、近所、仕事仲間とつながりが重層化し、問題に応じて助け合うことができる。

近年になって社縁、ネット縁なども出来たみたいだが、突然の解雇、見返してやると殺人など・・・縁として機能しているように見えない

ネットワーク＝縁・絆(2) 子ども達のつながり



- 父と一緒に海苔取り作業を手伝ったが、枝ばかりで仕事が増えた。
- 父とアサリ採り(生業)に行き、カレイを見つけて得意顔だった。
- 潮干狩りによく行った。

子供達は家庭、地域、自然、学校の中で重層的に人々と関わりあって成長した。

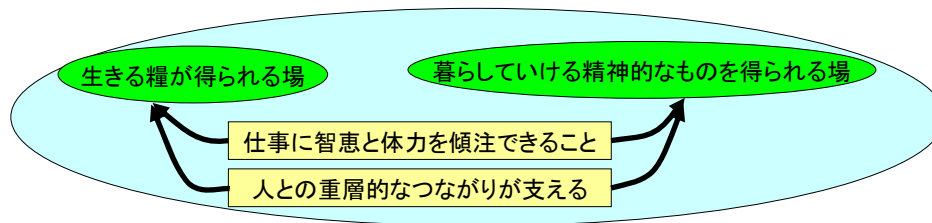
多摩川河口部で暮らす意味

多摩川河口部は

豊かであったが、その収穫は不安定であり、危険な場所でもあった。

そこは人々にとって

自分の才覚と努力により稼ぐことができた。また、互いの協力、助け合いにより生き抜くことができた。



多摩川の河口域と海辺は、多くの人々がくり返すことのできる日常を提供した。

そこは人が生きていける場、人生の舞台であった。

海と暮らした日々を懐かしむ老婦人 海を捨て少しだけ悔恨の念の老人



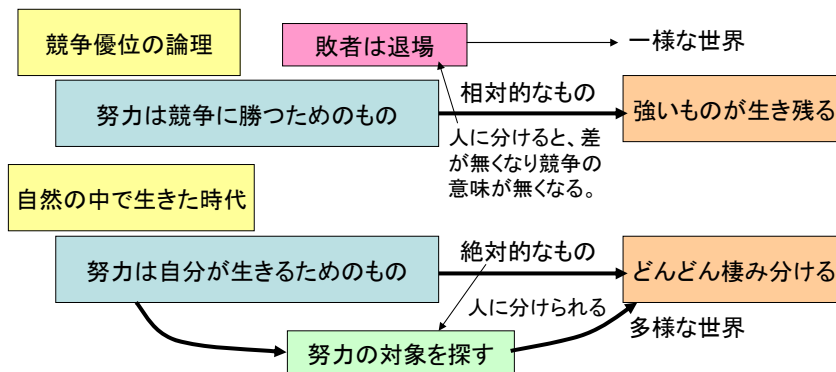
夫と一緒に漁に出た日々を懐かしみ毎日のように海辺に来る婦人。羽田の海と東京湾が経済価値では測定できない、そこに暮らす人々へ幸せをもたらしていたことの証をその表情に感じました。



糸状体の人工採苗技術があと10年早く確立されればと思う。幕張で実験的に糸状体をとったりはした。今でもその道具が家に残っている。漁業補償の上で、一部の漁場・漁業権も残さず、全面的に東京港の漁業を諦めたという点において、ある意味、**我々の世代は戦争犯罪人である(笑い)**。

少しだけ 無念を遺した 羽田海

補 足



父は公務員になってからも、船が好きで船を休み時間にも磨いたりして働いていた。しかし、それを周りの人は一人だけ働いていると、他の人に迷惑だといわれ、怒られてしまうこともたびたびあった。

経済競争に勝ち抜く努力よりも、自然の中で生きた時代の原理をどのように再生していくかに努力を傾注することが求められていると考える。